

「表面型表層拡大型食道癌の診断と治療戦略」と表題を掲げ、特集を企画した。本誌では1995年に「表層拡大型食道表在癌」(30巻8号)が特集されており、20年ぶりの企画である。本号はこの間に表層拡大型食道表在癌の診断と治療がどれだけ進歩したのかを知ることができる興味深い特集である。

本誌30巻8号を再読してみると、これまでの20年間で表層拡大型食道癌の診断法が内視鏡で大きく進歩していること、治療法の選択肢が増えていることがわかる。その一方で、症例数の少なさにもかかわらず導き出された結果が本号の論文にも引用されており、先人の慧眼に敬服させられる。

診断については深達度診断の問題がこれまでも指摘されてきたが、X線(小田論文)、内視鏡(竹内論文、石原論文)、超音波内視鏡(川田論文)のそれぞれの立場から診断の精度が示されている。これらの論文からまず感じたことは、画像の質のよさ、切除標本の取り扱いのよさ、そして詳細な病理組織学的検索に基づいた組織像と臨床画像所見との精緻な対比が行われていることである。本誌の神髄が示されている。質の高い診断を行うためにはそれだけの努力が必要なことを若い読者には知っておいてほしい。しかし、各先生方の検討結果をみると、まだまだ完璧な域に到達したとは言えないようである。さらなる創意、工夫を行い、より質の高い診断が完成されることを期待している。川田論文が示すように、いくつかのモダリティを組み合わせで診断することも必要と思われる。

表面型表層拡大型食道癌の病理学的特徴は堀口論文に示されているが、網目状形態という新たな指標が提唱されている。本誌30巻8号で病理を担当した同じ施設からの報告であり、病理診断の時代変遷をみることができるという点でも興味深

いものであった。

治療においては、ESDによる表面型表層拡大型食道癌の一括切除ができるようになったことは画期的と言わざるをえない。その治療法の成績が多施設共同研究として小山論文で示されている。本号の目玉ともいえる論文である。138例から得られた結果は、予後成績が極めて高く、ESDが表層拡大型食道扁平上皮癌に有効で、安全な治療法であることが示されている。

表面型表層拡大型食道癌の治療法としてESDが有用なものは深達度が浅く、リンパ節転移の危険性が少ない症例である。リンパ節転移の危険性が高いと診断された場合には、外科治療(島田論文)、CRT(門田論文)が選択される。いずれの論文も高い治療成績を示している。また、CRTはさまざまな場面で用いられるようになっていることが門田論文で示されており、多くの読者の参考になるものである。CRTは多に期待できる治療法であるが、主題症例(前田論文)のような再発例もある。今後は、包括的な検討を行うだけでなく、個別化治療の視点を入れていく必要もあると思われる。一方、治療成績の検討からは、小山論文、島田論文で指摘されているように、深達度診断が新たな課題になる。

本号は深達度診断、治療成績という表面型表層拡大型食道癌で今最も知りたいことを取り上げたものである。すばらしい結果を勉強することができたが、いずれもトップレベルの施設からの報告である。日常の場に目を向ければ、表層拡大型食道癌症例において、深達度が十分に検討されていない症例やESDの切除が不十分な症例をみることはまれではない。病理組織学的検索が不十分と感じさせられる症例もある。本号が表層拡大型食道癌の診断、治療をするうえで役立つ一冊であることは言うまでもないが、実臨床における質の向上につながるものになることを期待したい。